

漁場環境保全推進事業（概要）

増養殖環境部 林 芳弘

1 目的・方法と調査地

漁獲対象生物にとって有効な漁場環境の維持、達成を図るため、浦ノ内湾における水質・底質環境の現況、須崎市久通地区の藻場の現状をモニタリングする。

本調査の方法、調査地及び詳細なデータは、川上から川下に至る豊かで多様性のある海づくり事業の「平成17年度漁場環境保全推進調査事業報告書」において報告されている。また、当事業報告書内の「赤潮・貝毒調査」においては、本調査のデータも含めて、今年の浦ノ内湾の環境の特徴を詳細に報告した。そのため、ここでは要点について述べる。

2 結果及び考察

(1) 水質・底質と溶存酸素

浦ノ内湾では、近年においても、栄養塩濃度の減少は認められず、底質環境も改善されているとはいえない（林ほか 2006）。そうした環境を反映し、今年も夏期に溶存酸素が低下した。

底層（B-1 m）では、湾口部に近い地点を除く広い範囲で1 mg/l を下回る値を記録した。

養殖漁場における水深5 m の溶存酸素では、8月19日に2.64~3.76mg/l、8月29日に2.46mg/l、9月15日に3.11~4.50mg/l まで低下した。

養殖漁場より湾奥部では、溶存酸素の低下はより顕著であり、8月29日には、水深5 m で1.10mg/l となった。

同時期に発生していた赤潮情報に併せて、溶存酸素の低下に関する注意喚起を、FAX で漁協等に連絡したほか、水産試験場のホームページにも掲載した。溶存酸素の低下による漁業被害の報告はなかった。

2004年8月にも、養殖漁場の水深5 m で、2.49mg/l まで低下した（林ほか 2006）。浦ノ内湾においては、夏期の溶存酸素の低下は毎年繰り返されており、漁場環境改善の努力が望まれる。

(2) 底生動物

湾奥に位置する St. 5 は、9月の調査では、底生動物は全く出現しなかった。夏期の溶存酸素の低下や、硫化水素の発生が影響しているものと思われ、湾内の環境が改善されていないことを示している。

(3) 久通藻場調査

7月の調査時に、ホンダワラ属の海藻がみられた。この海藻を精査したところ、ツクシモクとキレバモクであると考えられた。

一方、平成15年度までの調査では、当調査地ではコブクロモクが夏期に群落を形成すると報告されてきた（石井ほか 2004、石川 2005）。

海藻の標本が保存されていないため、海藻の種組成が変化したのか、誤同定によるものか不明である。

参考文献

石井 功・石川 徹（2004）平成14年度高知県水産試験場事業報告 75-85

石川 徹（2005）平成15年度高知県水産試験場事業報告 88-92

林 芳弘・田井野清也（2006）平成16年度高知県水産試験場事業報告 45-62